

語り手 片桐利喜さん
(明治30年生まれ)

昭和61年8月3日収録

あらすじ

安倍保名という鉄砲撃ちがいた。
狐がよい女に化けて「かかしてごしなさい。」

飯炊きでも何でもします。「よから」と女に嫁になつてもりつたら、とてもよく世話やく嫁さんで、保名も喜んでおつたら、男の子が生まれたので『童子』という名につけ「童子や、童子や」とかわいがっていたら、その子が三つになった。お母さんは春になつたら「チョウコ」や「トンボ」やなんや取って食べなくなつてしまつたのだから、「この面を童子に見せちゃあ

狐女房

(西伯郡大山町高橋)



イラスト・福本隆男

元の話は伝説「信太狐」

狐「と書いておいて山の」 「ああ、これはまあ、

「ああ、これはまあ、 継ぎで包んだものと白い

尾根へ飛んでしまった。わしの嫁は狐だったすこ 継ぎで包んだものと二つ は、もらつたカラスの聴き耳を持たして上がらしたのだから。 安倍保名が仕事を終え だわい」と思つて、それ 出してきた。 「白い継ぎは乳だけえ、ほええと(泣くと)これ ほうましてごしなさい。そ 八卦見になつて、とても 繁盛したのだから。 その昔こつぱり。

解説

山陰各地でもこの物語は、断片的な形ではあるが聞くことがある。元の話は伝説「信太狐」であり、大阪府和泉市王子町がその舞台となつたと語られている。

それを持つて帰つて もう一回、見しぢやらかい。こうが見納めだけん」と行つたけれど「思ひ、子供に狐であることい切りがつかんけん」とを知られ「恋しくは尋ね来てみよ 我やどは 信太の森の うらみ葛の葉」の短歌を残して、森へ去つていくことになつて。 これについては現地の『和泉市史』第一巻に詳しい。 (元鳥取短期大学教授) (水曜日に掲載)